

『文學上に於ける現時の國家主義』を読む：批評

著者	睨天窟主人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 0
ページ	6 3 - 6 9
発行年	1895-11-04
その他の言語のタイトル	『文学上に於ける現時の国家主義』を読む：批評
URL	http://hdl.handle.net/2298/4711

毒とかや。まからんよりも、心爽かにして學ぶこと、却てたらちねへの孝行ならめ。秋月の歌、松露生の夕さればと同斷、やゝ題に外れて覺ゆ。なべて秋の月は、あはれこよなき風色かな、など打眺め打はれて、其清けさに、吾を忘るゝばかりなる所をこそ讀まめ。風のまに／＼、雲搔きわけて月の出るは、四時あり勝のことなり。されど、秋の字をよきて、只月と云たらんには、かの『雲晴れて後の光と思ふなよもとより空に有明の月』と云へる、古の名だたる歌にもかよひて、極めてめでたきものとならん。さすれば『白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちいに染むらん』などの歌と並べ唱して、人固より明德あれば、教によりて、いかやうなる人にも成立べき由を、幼な心もてる人に、知らする一助ともなりなまし。作者はかゝる意、ありしやあらざりしや、いかに。偕又彌生子、由來歌人ならず。さるに前號ゆくりなくも、かの玉歌三首に接す。其さえしきの然らまむる所と、いへ、豈にこれが原因たるものなからんや。所謂情物に觸れて、打によぶ聲の、自ら詞をなせるものならざるを得んや。されば、よしもなきこと歌とは異にして、句々皆意味深長、容易に端倪すべからざるを見る。げにふきわたるなぞり、けさ言たつる、あなうよの中などの語、其眞意ありやなしや、知る人ぞ知らん。

顧みればわれ此道に取りては難波津の何とさきまふるこそ無けれ。例の物好みの癖押へ難くて淺香山のあまはかにも拙なき筆もてかくは評しぬ希くば大方の諸彦我罪を深くな咎め玉ひうあなかし。

『文學上ニ於ける現時の國家主義』を讀む 睨天窟主人

世に一種の空想家あり、靜夜蒼天を仰いで宇宙の壯大なるに驚き、燦然たる星辰微光を垂れて高く麗るを望み、獨り自ら天地の秘奥に冥契したりと誤想し、揚々として其歩を移し、遂に脚を失して溝壑

に墜落することを知らず。憫むべきかな。

われ前號に於て『文學上に於ける現時の國家主義』を讀み、慨然とて自ら禁すること能はず。敢て所信を據べて告ぐる所あらんと欲す、唯憾む文辭甚冗漫、よくわが胸中の感懷を吐露する能はざるを。望むらくは讀者幸に語を以て意を害すること毋れ。

わが先づ疑ふは楮村學人が何故に『現時の國家主義』と特稱したるかに在り。學人自ら『時事に感じて此文を草す』といふ、現時の思想界、現時の文學界、果して學人の此論を促したる由縁のものありや。今や吾邦清國を膺懲し、遼東を占め、臺灣を領し、國威堂々旭日の輝くが如く、四方に環視せる列國をして、悚然として懼れ、惴然として伏せしめ、而して世界の強國として推重せしむるに至る、是素より皇徳の隆なるに由り、武人の忠勇なるに基くといひへ、巍然たる國民的精神一時に活動したるの致す所、庶くば千古に照して歴史の光彩を發揚することを得ん、此精神の煥發する所宜しく絶大の文學となり、大に國民的思想の發現とならざるべからず。今日の日本ハ既に自覺せり、自覺せるが故に自立することを得、自立するが故に飄々として搖動することなきを得、若し自立確乎たるものなくんば、いかんぞ生氣ある文學の發生を望むべけんや。彼の歐米文學の思想に心酔して、自家國有の思想を確持することなきものハ、唯昏亂迷惑、執る所なく、守る所なき浮萍の如し。此の如き輩豈文學の何たるを知らんや、抑も亦文學を味ふことだに能くせんや。われ今日に當りて國民文學の聲益高らんことを望むも、未だ學人の如く悄然として嗟歎する如き高踏的思想を有すること能はず。

學人の語に據れば、『國民的精神はやがて國家主義の基礎即ち其裏面にして、國家主義はその精神の表面即ち發現に非ずや』。まかり、學人の言ふが儘に言はしめよ。學人は此論斷を根據としつゝ、國民文

學を唱道するものを唾棄排斥せざるを得ずといふ。而して其主意とする所は、曰く保守的、排外的、攘夷的なるが故に之を排斥すべしと、何ぞ其議論の無鐵砲なる。學人或は言はん、余が攻撃詰難するは國民文學の語を排斥するに非ず、唯假面を被むれる國民文學を排斥するのみと、われ學人の爲に少くとも此の思想あらんことを冀ふと雖も、不幸にえて學人ハ全然國民文學を拒否するを奈何せん。見ずや劈頭の一段、學人は文學と國家とを兩極端となし、根本的に差異あるものとし、決て二者の合一を許さず。いふんぞ國民文學といふ名目だに存在するを容さんや。獨り知らずや文學は人の思想の反響なり、而て人は國民的精神を離れて――國家を去りて何の處にか高踏せんとする。月世界か、天境界か、あはれ汝の脚は何の處にか立つ、われ其溝壑に失墜せんことを恐れて已まず。

漫然世界文學といふ、其意義誠に廣大なるが如き、まかれども、國民文學を除いて何の處にか世界文學を究むべき。各國に文學あるは世界といふ思想の反響に非ず。乞ふ一部の文學史を繙いて其發生と進歩とを研究せよ。文學の起りたるハ何によるか、はた文學の發達は何によるか。よし文學の目的は理想に在りとせよ、さて其文學は各國其歴史を同うする乎、其發生を同うする乎、其發達を同うする乎、各國皆其人種を一にするか、其四圍の境遇を同うする乎、其地勢は如何、其氣候は如何、其習慣は如何、其言語は如何、其他あらゆる關係は如何。此各國特有のものあり、各國特有の思想あり、故に各國特有の國民文學あるを要するなり。英文學を研究する人は單に英語の發音と意義とを解するを以て足れりとするか、英國の文學にハ特色あらざるか、英文學中の詩を和譯すれば直に日本の思想となるか。忠君の情熱ゆるが如き萬葉集を英語に譯すれば、直に英國思想となるか。若し此問を否まば、是れ各國特有の文學あるを證する也、而して是れ實に文學が全く國民的精神を離るべからざるを証す。

る也。蓋し文學は國家に先ちて生るゝものにあらず、國家あり、國民あり、而して其思想を發現する文學ある也。既に國家に後れて生ず、其國民的精神に據りて立たざる可からざるは、炳然とて火を觀る如し。唯漫に文學の目的の理想に在るを望んで、其據て立つ所以の者を忘る、是唯宇宙の大を望んで、自家の地上に在るを知らざると何ぞ擇ばん。

國民的精神とは排外、攘夷、保守の意義に非ず、わが邦今日の戰勝を以て國民的精神の結果なりとする事は、如何に偏狹なる人と雖も、之を首肯せざることを得ざるべし。固より歐米の文化を利用する日新の智識を活用し、由て以て非常なる奏功を得たる所多しと雖も、若し其根底に國民的精神の炎々たるものなくんば、いかによく斯の大捷を占め得んや。人あり若し此精神を以て排外、攘夷、保守なりとはいは、誰か其論斷の偏なるに驚うざらむ。蓋し國民的精神とは其根底に各國特有の意思を有するをいふなり、他國の長處を陶鎔して自家の思想中に同化するは素より最も切要なるもの。若し是あるが故に各國皆其固有の精神を棄て去るべしといふものあらば、誰か其の暴論に驚かざらむ。直に外國の思想精神を移すも、決して自國の思想精神となすことを得ず、唯夫れ自國固有のものによりて之を同化すればこそ始めて力ある効果を奏することを得べきなれ。われ學人の意の決して此の暴論の如くならざるを信せんと欲す。若し漫然、理想といふ文字に眩惑して其眞意を忘れ、世界的文學といふ字面に心酔して其本義を解せず、徒らに嘵々として自ら得たりとするものあらば、われ必ず極力排斥せざるべからざるを信ず。

情激するの餘、筆を馳せて此に至り、覆讀一番すれば殆んどわれ自らわが意見を吐露せるのみ。之かもわれ尙未だ止むる能はず。請ふ尙少しく貴重なる紙面を假らむ。

學人ハ唯文學の目的を一方面より解釋せるのみ、未だ其眞趣を味ひ、其位置を論究せざるものに似たり。倘しわが推測をして誤なからしめば、文學の目的ハ、美や、愛や、神や、月や、花や、を感悟し、述作するに在るが故に、國家の如き現實のものと相渉るを要せず、故に文學は國家的といふものと相合すべからずといふが如き、一派の達觀的文學—余が用語の粗を咎むること勿れ—は、恐らく國民文學をいふものよりも、實に學人のお氣に入ることならん。よし美といひ、愛といひ、神といひ、月といひ、花といひ、物夫自身が國家と緣因なきは言を竣たず。まづも之を觀、之を述ぶるものハ思想ハ、全然皆同じからざるべからざる乎。各國其風土の異なるあり、其人種の同じからざるあり、而して其歴史の一ならざるあり、其思想、其感情從つて異ならざるを得ず。故を以て文學ハ必ず國民的精神を踏臺として其上に立たざるべからず。若し此精神を離れんか、文學ハ死物なり、何に由りて發達し、何によりて進歩せん。敢て問ふ國家を離るゝ文學ありやなしや、あり得べきやあり得べからざるや。

學人既に『現時の國家主義』といふ。惟ふに學人は現時の二字を以て攻撃の中心とする覺悟ならむ。上來わが論する所にして誤なくんば、文學上に國民的精神の缺くべからざるハ既に明なり。まかれども、學人の文を讀みて其意の存する所を察すれば、學人が文學の國家と相渉るべからざるを信するとは疑ふべからず、もし學人にまて眞に文學の國民的精神に據て立たざるべからざるを信せば、何の要あつてか國民文學を排斥することをせん。假面といひ、實物といふ、其義に於て大差あり、まかれども、是學人一己の判斷のミ、何故に仮面にして、何故に實物ならざる。是素より言を謹むものハ妄に出すこと能はざる所、知らず學人は如何なる標準によりてか之を判別せんとする。學人既に文學と國家とを取りて兩極端とす、何を進んで文學と國家主義と相容るべからざるを論せざる、抑も亦何を苦ん

でう現時といふ語に拘泥する。

學人の語によりて之を推究するに、國家ハ現實に據りて立ち、文學は理想を踏臺とす、故に兩者は相合す可からずといふが如し。理想と實際とは決して相容る可きものに非ざる乎、理想と實際とは全然無關係のものなるを、實際と離れて理想といふ思想あることを得べきか。われ千思萬考えて其義の在る所を解する能はず。よき文學の目的は理想に在りとせよ、國家の目的も亦理想を趁ふにあらざる乎。然らば學人が劈頭に道破せし所――全篇の主旨の由て來る所ハ如何に解すべき。國家と文學との相容るべからざるを言ふは、反て不合理、不自然の計畫にあらざる乎。

わが此論をなすは國家の爲に文學を作爲せよといふにはあらず。生氣ある文學は國民的精神を離る可からずといふに在り、而して歸着する所は、理想、世界文學などの字面に據りて、文學の據りて立つ所以のものを忘るゝ者を排せんとするに在り。思ふにわが言ふ所は或ハ學人の所謂俗論なるべき。われば『理想も觀念もなきもの』と憫笑せらるゝとも、理想といふ意義、觀念といふ本旨を解すること明瞭ならざるものに比しては、寧ろ楽しく感ぜざるを得ず。

由來文學の目的といふもの未だ明解せられしことあらず、はた文學といふ辭の意義すら未だ一定の見解あることなし。是古今東西其揆を一にする所、而して其確然たる見解なきは反て文學の進歩ある所以の一端なるやも測られず。今妄りに此論を草して獨りわが無謀に慚づる所多し。それ唯明解する能はずと雖も、其據りて立つ所のものに至りては、われ必ず國民的精神ならざるべからざるを信じて疑はず。學人屢世界主義を云ふものを吹聴す、之かして又無限、絶對の語を用ふ。是等が文學の據て立つ所のものならば、古來の國民的文學は文學にあらじ、將來に於ても亦然らん、然らば天下に文學な

し、嗚呼文學も亦妙なるもの哉。

且つ夫れ文學の時代に從て變遷するは、一部の文學史を讀むもの皆よく之を知る。時代を離れて文學なきは、人の時代を離るゝ能はざると擇ばず。知らず學人はよく時代に超越せる文學ありとなすことを得るか。

われ今學人の論に對て一々細論する要なし、唯大体の論旨に於て首肯し得ざるものあるを以て。今所思を據ふること斯の如し。文辭龜雜禮を飲ぐ勢からず、請ふ推讀寛假する所あれ。

雜 報

第五回紀念會

蘇嶽高し、巍然として雲表に聳ゆ、白川長し、滔々として絶ゆることなし。蘇嶽高しと雖も、吾校盛名の天下に高きに孰若ぞや、白川長しと雖も、吾校隆運の無窮に長きに孰若ぞや。吾校の盛名を蘇嶽の高きに擬するを休めよ、吾校の隆運を白川の長さに比するを止めよ。巍然たる蘇嶽は吾校盛名の高きによりて愈高きを加へ、滔々たる白川は吾校隆運の長きによりて益長きを加へ

つゝあるに非ずや。烏兔匆匆、盛名隆運を趁うて推移し去り、今や方に第五回紀念會を舉ぐるに至りぬ。十月十日、紀念式は例によりて雨天体操場に舉行せらる。此日天色清澄、一片の纖翳なし。式場に正面に第五回紀念の大字を揮毫せる巨額を掲ぐ。額面ハ粟粒を糊布し、額縁は蘇鉄葉を挿み、粗率飾らざる所、雅趣却りて饒し、其前には旭旗、軍旗と交叉し、球燈數千、翻翻たる小旭旗と相錯り、翠色滴々たる松葉其間を點綴し、紅綠掩映、燦として眼を奪ふ。場の正面に壇を設け、美髯卓を覆ひ、卓の左右二大花瓶相對し、秋芳亂發、幽葩玉簪、異香頻に人を襲ふ。來賓には市川大佐、木澤師團副官、岡本獸醫長、安樂書記官、山